

企画調整員(ボランティア事業)\*からひとこと



経済発展が進むラオスで、エコヘルスの考え方はこれから必要になってきます。教員を目指す学生たちにその概念を教えることができるようにしているのが、鈴木さんの活動です。ラオスで活動できてよかったと思えるよう、残りの任期を大切に過ごしてください。

JICAラオス事務所  
中原二郎さん

\*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。相手国の要望を調査し要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。



もっと  
わかりやすいほうが  
いいね

他の教員養成校と、エコヘルス教育の合同研修会も開催。



JICA海外協力隊  
がゆく Vol. 3

ゆったりと流れる時間に、訪れた人の多くが魅了されるラオスで、エコヘルス教育の普及に取り組む協力隊員がいます。

in ラオス  
鈴木春花

すずき・はるか  
25歳  
出身地: 埼玉県  
職種: 公衆衛生



+one information

ラオスの布に一目惚れ

「ラオスにいったい何があるというんですか?」

これは村上春樹さんの紀行エッセイのタイトル。私がこの質問を受けたとすれば、迷わずに「布!」と答えるだろう。

ラオスには49の民族が暮らす。細かく分けるともっと多いともいわれている。それぞれが独特の文化を持つが、最も特徴が出るのがファッションだと思う。同じラオスという国で生きているのに、こんなにも違うのか!? と驚く。

民族衣装もとても魅力的なのだが、私はラオスの布にハマっている。民族(地域)ごとに模様や色合いに特徴がある。素材はラオシルクもあればラオコットンもある。そしてなにより手織りで生み出される布は、すべてが一点もの。休暇のときにラオスのいろいろな街を訪れ、その地域、そこに暮らす民族がつくり出す布に出合ってしまったら、一目惚れして買ってしまおうのである。

任地に戻り、買った布でさっそくシン(ラオスの巻きスカート)を作る。職場に着ていくと、すぐさま女性の同僚たちから「きれい! この布はどこで買ったの?」と聞かれる。「ありがとう、いいでしょう」と自慢しながら、女の子たちの話題は世界共通、「おしゃれ」なんだなあと思ってしまう。

(鈴木春花)



イラスト ● さかがわ成美



やっと教科書が  
完成しました

上: エコヘルス教育の教科書ができ、贈呈のセレモニーを行った。右: 教科書は日本の大学の先生、ラオスの教授陣が中心になって執筆した。

の認識が低く、教科書もない状況でしたが、研修会を開き、18年には教科書もできあがり、少しずつ私のやるべきことが見えてきました。今では、私が授業研究会に出席できないときは「動画で記録しておくから、春花が帰ってきたら一緒に見て意見交換をしよう」と言ってくれるまでになり、「もっと授業を良くしたい!」という同僚の思いが伝わってきます。

エコヘルスの考え方による、目の利益だけにとらわれない社会づくりが教員養成校から始まり、将来ラオスをつくる子どもたちまで届いてほしいと思っています。

ここが  
ポイントです!



教員養成校で行ったエコヘルスの授業の様子。グループワークで出た意見をクラスメイトに発表する生徒。

当初はエコヘルス教育について

私がラオスと出会ったのは、養護教諭の養成課程で学んでいた大学時代に参加した大学の教員主催のスタディツアーでした。ラオスのスタッフと一緒に小学校での健康診断や健康教育に関わるうちに、ゆったりと時間が流れる居心地のよいこの国で、ラオスの人たちと一緒に働きたいと思うようになりました。大学卒業後の進路を考えていたときに、東京学芸大学にはJICAとの連携プログラム

があり、大学院に所属しながら協力隊員として活動できることを知り、「これは応募するしかない!」と運命を感じました。

念願がなって派遣されたラオスでの活動地は街全体が世界遺産の古都ルアンパバーン。中心地は外国人観光客が多くにぎやかですが、車で10分も行けば、雄大なメコン川が流れ、緑豊かな山々に囲まれたいつも通りのラオスです。私の職場は、そこにあるルアンパバーン教員養成校で、同僚とともにエコヘルス教育の授業づくりと実践を行っています。

エコヘルス教育とは健康教育と環境教育を合わせた教科で、「人間の健康」「生態系」「人間の生活・行動」「社会経済発展」の相互関係を知り、それぞれのバランスを考え、国づくりや社会づくりを教えます。2019年9月から教員養成校の正式カリキュラムになる予定ですが、養成校には指導できる教員が一人しかいません。そこでこの教科を担当予定の教員全員が参加する研究会を行い、効果的な質問や内容理解のためのアイデアを考えて授業を組み立てています。また、ラオス人同士で意見交換ができるように、ほかの教員養成校との合同研修会も定期的に開催しています。

エコヘルス教育で  
ラオスの国づくりに  
協力しています



私がラオスと出会ったのは、養護教諭の養成課程で学んでいた大学時代に参加した大学の教員主催のスタディツアーでした。ラオスのスタッフと一緒に小学校での健康診断や健康教育に関わるうちに、ゆったりと時間が流れる居心地のよいこの国で、ラオスの人たちと一緒に働きたいと思うようになりました。大学卒業後の進路を考えていたときに、東京学芸大学にはJICAとの連携プログラム